

霧隠軒より折々によせて（第四回）

『無心の一步が千里を生む』

本格的な夏を迎え猛暑だが、ふと昨年のことを憶い出した。

その夏の終わり、信州御嶽山おんたけさんに登った。登山らしい登山は本当に久し振りで、三千メートル級の山は学生するとき以来であろうか。しかも老若男女十人、全く素人の俄にわか登山だ。

さて、午前七時に七合目から出発した我々に、青空のむこうから残暑の陽射ひざしが照りつけ、皆直じきに喘あえぎ喘あえぎ登ることになった。

一人遅れ、二人立ち竦すくみ、三人へたり込む、そんな山行さんこうで、それでも給水を頻ひん繁ぱんにしてただひたすら頂上を目指した。

斯かくして数時間。だがこの名峰は十合目の頂の向こうに真の頂上がある。だからようやく辿たどり着いたと安堵あんどす

ると、又一重またの山を見て愕然がくぜんとする仕組みになっている。

もう充分じゅうぶんと思ったが、最高齢で気力の限りを費やして登ってきたのであろう、一人の婦人の顔を観みて、小柄わたしは全員の登頂を決意した。

軽い食事の後、どうにか小一時間で登り切る。

この婦人も、最後尾を亀かめの歩みのように登ってきたが、遅れること僅わずか二十分で頂上に立った。

その瞬間を、小柄はスローモーションの映画を観るように今でも彩あざやかに憶い出せる。

このひとは最後の一步を踏みしめたところが頂上だとは暫しばらく気付かなかった。

それは足元が平地になったことが不思議だという表情だった。すると数秒して、みるみる顔の極度の緊張が解けて涙が溢あふれてきた。

途端とたんに手で顔を手で覆ってしまったが、小柄には涙の一粒一粒が見えた気がした。

良かった。何度下山の誘惑にかられ、その正当性を自

問したことか。それでもこんな好機は二度とない。自分にも仲間にもである。

だから登った。そうしてこの方も登ることができた。

後は下山。こちらの方が危険で難しい。しかしそれはもう書かない。誰もが無事に宿に帰れたことが嬉しかった。

それから三日も経たないうちに、寺に一通の手紙が届いた。先の婦人からであった。簡素な文章で、この間の御礼と感動が綴られていた。

そこに「余りの辛さに、自分の体力では登っても下ることができないのではと、強い不安に襲われていました。しかしあるところで、もう限界だと覚った時、突然私には上ることも下ることも許されないのなら、この一歩だけで良いから足を前に出そうと心に決めました。それからはこの一歩、この一歩と。すると思いもしなかった頂上に何時しか立っていたのです」とあった。

嗚呼それであのような美しい涙に出遇うことができた

のだなと合点がいった。

千里の道も一歩からと言うが、これは逆にこの一歩こそ確実に千里を生むということだ。

まさに、そんな無心の一歩一歩の積み重ねが、偉大な結果も、深く清らかな感動も齎<sup>もたら</sup>してくれるのである。